

小学校英語科における指導と評価の一体化 － パフォーマンスと振り返りの相互作用 －

英語科研究部

本校英語科では、重点単元の終末部分や複数の単元を総括する学期末などの課題として、パフォーマンス課題を位置づけ、相手意識をもって伝え合う「必然性のある場面設定」を行う。ここで言う「必然性のある場面設定」とは、常に必ずしも外国語圏を再現したような場面や非日常的（イベント的）場面を意味するわけではなく、児童の日常生活と密接に関連し、思考・表現する必然性がある場面を指す。ゴール（パフォーマンス課題の遂行）に向かう過程では、音声を中心に慣れ親しんだ言語材料を自らの思いと結びつけながら整理・選択（判断）し、有意味な文脈で使用する等、インプット・アウトプットを繰り返しながら思考を深めていくことが肝要である。そのような思考・判断・表現の過程を重視した単元設計に基づく実践により、伝え合う力の育成を図ることが可能となる。

英語によるパフォーマンスを児童自身にモニタリング・コントロールさせ、振り返りと連動しながら改善を図るために、本校英語科で力を入れて取り組んできたのは以下の3点である。

① 教師用ルーブリックを用いたパフォーマンス課題と評価（形成的評価と記録に残す評価）

筆者にとって、ルーブリックを児童と共有する第一目的は、児童が英語授業中にコミュニケーションを図る際に、目標をもって取り組むことができるようにするためである。児童が表現活動を行う前に、何をどう頑張れがよいのかを提示し、共有することによって、授業の中で目標をもって取り組むことができる。パフォーマンスにおいては、自分の思いや気持ちを伝えるためにどんな工夫をすれば伝わるのかを考え、ジェスチャーや簡単な単語を使って英語を話すことが重要である。

第二目的は、ルーブリックを児童と共有することにより、現在の課題が見えるため、次回の言語活動への学習意欲につながるということである。児童一人ひとりの課題は当然異なり、その課題をクリアするために授業や家庭で自主的な学習ができる。自律した学習者を育てていくためにも課題を可視化することは重要である。

第三目的は、表現したい内容や方法を明確にできるということである。話す内容

においては、児童がコミュニケーションを図りたいと思うような話題や題材が必然である。また、小学生段階だからといってただ話せばよいというのではなく、意味やつながりを考えて文章を構成する必要もある。日常生活や国語科の時間には当然行っていることである。日ごろからどのように表現すれば相手に聞いてもらえる内容になるのかをループリックから児童自身が知っておけば、表現を構成する思考力や判断力がしだいに身に付いていくと考えた。「話す方法」についても「現段階で学習している言語材料を使えるようになる」と何ができるのか」を知ることによって、児童の意欲を引き出すことができると考える。

② 児童用ループリックを用いた目標に向けた自己調整学習

一人一台の児童用端末の活用により、児童が自身で自分のパフォーマンスを振り返ったり、教師や友達のパフォーマンスと比較したりすることが容易にできるようになった。本校英語科でも、表現活動の練習段階において、自身のパフォーマンスを端末に録画し、それをGoogle Classroomで共有することによって、児童同士で映像を見て改善できるようになった。練習段階では、自分のペースで何度も繰り返して録画することができ、自身のベストのパフォーマンスを追究することができる。そして、次にこうすればこうなるよということができることを「見える化（可視化）」することが大切である。児童に理解できることばで示し、自分自身で評価させる取組を継続することで、児童の自己効力感と有能感・メタ認知による自律性が高まるのではないかと考える。

③ 振り返りシートを用いた自己評価による授業改善（教師）・学習改善（児童）

ただやみくもに児童自身の規準で自由に振り返るのではなく、最初に集団や個人の学習目標設定があると、目指していたものと現実との間を知ることができる。目指す目標と現実とのギャップを知り、そこをどのように埋めていこうとするのかが大事である。感覚だけで目標設定をしていた頃よりも、目標を自己決定し、意識して臨むことで、今回はどのような頑張りであったのか、次回はどのようにしたいのか、何を指したいのかが自然と児童から出てくるようになった。先に指導者から目標が与えられるのではなく、自分で決定できることで目標が明確になる。また、自分で決定した目標が達成できれば、自信になることはもちろんであるが、満足感だけではなく、そこに教師や仲間からの誉め言葉が加わると、より児童は周りから認められていると感じ、自己効力感は増すことになる。

（ 文責 西原 美幸 ）